

銀河の聖戦士

田中光二 徳間書店



銀河の聖戦士

昭和五十四年三月十日 第一刷
昭和五十四年八月十日 第四刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著 者 田 中 光 二

発行者 徳 間 康 快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(433)六三三二番(代表)
振替東京四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求め
の書店にてお取り替えていただきます)

編集担当 芦沢孝作

銀河の聖戦士

目次

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

	プロローグ・1	7
	プロローグ・2	12
第一章	戦士の復活	17
第二章	査問委員会	29
第三章	出撃	49
第四章	流刑の惑星	69
第五章	砂漠の奇蹟	89
第六章	再び戦場へ	109

第七章 自由の戦士 129

第八章 狼が出合う時 149

第九章 宇宙要塞攻撃作戦 169

終章 はるかなる銀河へ 189

エピソード 209

あとがき 211

装幀／矢島高光

カバー・本文イラスト／加藤直之

銀河の聖戦士

プロローグ・1

矢吹劍は、十九歳だった。

矢吹劍は、生き甲斐ということばを、知らなかった。
矢吹劍は、退屈していた。

自分が、どんな目をしているか、彼には分かっていた。飢えた狼の目付だ。ぎすぎすにやせさらばえ、体には垢と泥がこびりついた若い狼で、いつも物欲しげ

に人里の隅りをうろつき回っている。

その自分の姿が、今日はなぜかはつきりと見えた——彼は、ゲームセンターの脇の路地の暗がりにならずくまって、アンパンをやっている二人の仲間たちの傍から離れ、明るい通りへと、よろめき出ようとした。たしかにシンナーの酔い心地はわるくない。すべてが軽くなり、この世界が泡立つ甘いクリームか、砂糖菓子で出来ているかのように感じられる。

だが、今、彼は奇妙な焦りを感じていた。

アンパンの味も、すてたものじゃない——だが、もっとほかに、心にジンと響くものがある筈だ。

二人の仲間が、トロンとした目を上げて——もう完

全に出来上がっているのだ——、彼を見送った。哲にヨッチャン。二人とも、商業高校の同窓生だった。在学中から三人は気が合い、いろいろときわどい真似をしてかして来た。

社会から押しつけられた決まりを破る、才能に、三人は秀でていた。その一点で、絶妙に気が合ったのだ。しかも、間一髪のところ、いつもことが表沙汰になるのを免がれて来た。

親は、どうしていたのかって？ 親などは、チョロイものだ。そもそも、彼には片親しかない。小料理屋の主人だった父親は、彼が小学校六年生の時に死に、母親が麻雀荘をいとなんで、暮らしを立てている。彼女は息子に甘く、どうか高校を卒業した息子が、担当教師の骨折りでせっかく決まった就職先から——中規模の製靴会社の事務員だった——、上司と喧嘩して半月足らずで飛び出してしまった時も、そうきびしくは叱らなかつた。

しばらくは遊んでおいで。ゆくゆくは家を手伝ってもらうかも知れないから。そういつて、たっぷりした

小遣いを与え、彼の好きなままにさせていた。

二人の友達達の境遇も、似たようなものである。哲の家は、やはり父親がおらず、母親が一人で小さなバーをやっている。男と遊ぶのにいそがしく、息子の世話を焼くひまはなかつたのだ。

ヨッチャン——本名は、良彦だ——のところは、れつきとした公務員の家庭で、両親そろっているが、ぐれて、まともにはたらこうとしない出来のわるい次男坊に、愛想をつかしている。ヨッチャンは、家にあつても、空気のようになんて無視されているのだ。

——彼はかつて自由を願ひ、そいつを手に入れた。朝七時に起きなくていい自由。いやな係長の顔を毎日見なくてもいい自由。砂を噛むようにつまらない帳簿づけに、八時間縛られなくともすむ自由。

彼は自由を手に入れ、首までどっぷりと浸った。だが、思ったほど幸福ではなかつた。自由と、退屈——この二つのことばが、これほど似ているとは思わなかつた。

そう、彼は退屈していたのだ。それも死ぬほどに。

何かがちがう、と彼は思った。おれは若い。おれの血は熱く、音をたてて血管を流れている。四肢は弾力にみちあふれ、筋肉は酷使を待って軋^{しん}んでいる。

それなのに、なぜその使いみちが、見つからないのだ？ 退屈だけが、いつもまつわりついて来るのだ？ どこかに熱い眩しい何かが待っている筈だ。そいつを見つけないばならない。

「……よう、どこへ行くんだよ？」

哲が、ろれつ^{ろれつ}の回らない舌で呟くのが聞こえた。

「そっちへ出ると、危いぜ」

ヨッチャンがいった。

だが彼は立ち止まらなかった。ちらりと振り返り、すり切れかけた雑巾のようにうずくまっている二人の姿をぼんやりと瞳に焼きつけると、歩道へ足を踏み出した。

土曜日の夜。午後十一時。

新宿・歌舞伎町にとっては、宵の口だった。まだ底冷えはするが、それでも春の香りが、かすかに夜気に漂い始めていた。通りを埋め尽して流れて行く若い男

女も、すでに真冬の重苦しい装いはしていない。セーター一つにしても、明るい春の色を着こなしている。

酔っている者も、そうでない者も、いちように幸福そうに見えた。若い恋人同士は、いわずもがなだった。強烈な疎外感が、彼を突き抜けた——なぜ、彼らだけが、あんなに輝かしい表情^{かっけ}をしているのだ？ 孤独とは縁のないような風情をしているのだ？

なぜおれだけが、胸を鋭い焦りの針に、刺されなければならぬのだ？ ——だが、見ていろ、おれにだって、出来る。やつらがみんな目をむくほどの、でかい仕事をやれる腕と度胸を持っているのだ。そいつを、今すぐ分かせてやるぞ。

彼は、足をもつれさせながら歩いて行く自分を見つめる周囲の冷ややかな、無関心な目に、気づかなかった。それは都会に住む人間特有の、病的なまでの非情さをはらんでいた。群衆にとって彼は透明だった——彼は、存在として認められさえしていなかった。

彼は、この都会の吹き溜りが生み出した人間、一片のごみにも似た関心を向けるにも当たらない人間とみな

されたのだ。

その時、爆音が耳に届いた。下腹にひびく低いエキゾーストノイズだ。ゆらりと振り返ると、真紅に塗られたスポーツカーが、ゆるゆると通りに滑り込んで来るのが、目に入った。その車は、一見してただ者なように知れた。——低く、地を這うようなスパイダーの姿態に、鎌首をもたげた蛇のように前方を睥睨しているリトラクタブル・ヘッドライト。

行き交う人々の、羨望と反撥の入り混った視線を浴びながら進み、彼の傍に近づいて、停まった。ブルゾンを粋に着こなした若い男が、降りて来た。夜というのに、レイバンのサングラスをかけている。

周囲の視線をことさら無視する風情で、ゆっくりと煙草をくわえ、金張りのデュポンのライターで火を点ける。——肩をそびやかせながら、彼の目の前をよぎり、傍のコーヒーストップへと入って行った。

おそらく、恋人と待ち合わせでもしているのだろう。その男は、つまり全身で、突っぱって、いたのだ。だが、その虚栄が致命的な過ちを生んだ。

彼が吸い寄せられるようにその車に近づくと、太い野性的なエキゾーストノイズが聞こえて来た。

男は、エンジンをかけたままで、車を離れたのだ。すぐに戻るつもりだったにちがいないが、夜の都会で、すべき事柄ではなかった。

彼は、気がつくとも、ドライバーズシートに、体を滑り込ませていた。シートは、まるで謎らえたかのように、彼の体にしっくりと合った。淡いグリーン照明に、インスツルメントパネルが浮き上がっている。彼を、酔わせずにはおかぬ光景だった。

彼は、アクセルをおおって見た。回転計の針が、蹶飛ばされたかのようにね上がり、エンジンが、排気音と一体になって力強い咆哮を奏でた。

すべてが、彼を一つの道へと誘っていた——疾走ることへと。

車の運転には、慣れている。無免許ではあったが、哲の車で、折にふれてころがしていた。腕には、いささかの自信はあったのだ。

シフトを一速に入れた——その時、叫びが聞こえた。

ふり向くと、若い娘の肩を抱いてコーヒーショップから出て来たあの男が、拳こぶしを振り上げていた。喚わめきながら、走り寄って来た。

彼は、踏み込んでいたクラッチを離した。スポーツカーは、はげしく後輪をスピンさせながら、跳び出した。車道をふさいでいた人々が、悲鳴を上げて跳びのくのが見えた。

すでにその時は、彼の意識いんしは、真紅に染まっていた。オルガスムスに似た灼熱した快感が、全身をしびれさせていた。彼は、自分が、解き放されたことをさとした。この忌々しい、くそ面白くもない、どぶにでも蹴り込んでしまいたいような、反吐を誘う「日常」というやつから。

おれは自由だ。真の自由を、今獲得したのだ。

ギアはもう、二速に入っている。車は、信じられないほどの加速ぶりを見せていた。よほど凄いエンジンエンジンを積んでいるにちがいない。

タイヤを軋ませ、歩行者を蹴散らしながら、新宿通りへと飛び出した。泡をくらって急ブレーキをかける

タクシーの間をすり抜けながら、驀進した。

すばらしい音楽が、全身に高鳴っていた。

たちまち、信号が迫って来た。黄から、赤に変わる寸前だった。彼はアクセルをゆるめようとはしなかった。ブレーキの存在を、忘れていたのだ。

交叉点に、突っ込んだ。右手から、オレンジ色のタクシーが、急ブレーキの悲鳴を上げながら迫って来た。信号が変わるのを見すまし、スピードをおとさずに、その交叉点をくぐり抜けようとしたのだろう。真紅のスポーツカーの出現に、文字どおりどきもを抜かれ、ブレーキを踏んだのだ。

彼の反射神経は、しかしまだ失なわれてはいなかった。とっさにブレーキングしながら、ステアリングを左に切った。左折して、逃げようとしたのだ。スポーツカーは、四つのタイヤをスキッドさせながら、振り子のように弧をえがいて回った。

……次の瞬間、まばゆい怪物が迫って来た。ヘッドライトを怒らしたトレーラー・トラックだった。

一秒の数分の一の時間に、彼は、自分の短かい一生

を思い浮かべた。

一トンの鉄とゴムとガラスの塊が、それに数十倍する同様の怪物に激突し、その前半分が、彼の柔らかい肉体を押しはさみながら潰れた。

矢吹剣は、死んだ。

プロローグ・2

彼は、空を漂っていた。

自分がひどく、軽く、なったのが感じられる。肉体という、重く不細工なしろものから自由になった——解脱したということを、さとしていた。

肉体とはしよせん、精神Ⅱ魂を仮におさめてあるだけの、容器にすぎない。うつろい易く、損われやすい器だ。

彼の魂は、そこから抜け出ていた。彼がかつて知っ

ていたすべての物理法則を、超越した存在となっていたのだ。人間は、それを「死」と呼ぶ。だが彼は、自分が決してほろびていないことを知っていた。

肉体はなしかに失なわれた。——しかし、彼という存在の核となっていた精神Ⅱ魂は、少しも傷つくことなく、残されている。現実の諸条件に支配される肉体を離れて、いわば安息の状態に還ったのだ。

これが「死」というものの実体だ。しかしそれは、肉体における生を生きる者にとっては、永遠に認識されないものなのだ。その生が断ち切られたのち、初めて真実に到達することが出来る。

彼の心は、よろこびに充たされた。かがやかしい、法悦にも似たよろこびだった。

人間は、——すべての生物はと、いいかえてもいい——ことばの真の意味で、死ぬことはない。魂は不滅であり、肉体の死は、仮のものだ。仮の宿である肉体から肉体へと移り、さまざまな人生を渡り歩く、永遠の旅人なのだ。

彼は、無数の星くずがきらめく、温かい甘美な闇に

みたされた世界を、ゆったりと漂い続けた。胎児のやすらかさが、彼を押し包んでいた。

そのたとえは、正しかったろう。彼は、一つの肉体における——それは、矢吹剣という名で知られていた——生を終え、次の生への転移にそなえて、生命の子宮とでもいうべき世界で、休息しようとしていたのである。

それは、あるいは人間たちが天国と呼んでいる世界であるかも知れない。しかし、五彩の雲にいろどられ、蓮の花が咲く夢幻的な世界とはちがっていた。異次元と呼ぶにふさわしい、時空間を超越した、しかしそれなりの物理法則に支配された世界であるようだった。

安らぎに浸りながらも、かすかな虚しさが、彼の内部に在った。たしかに彼は、ひとつの生を終えた。だがその生は、みのり多きものではなかったような気がする。飢え、孤独、絶望……それがないまぜになった、心が冷えるような記憶が、彼の一部に残されていた。

——そうだ。

ふいに、声がさやいた。どこから発せられたものか、分からなかった。声の主は、その世界すべてにわたって遍在しているかのようである。彼の意識に、音楽のように共鳴しながら、泌みわたって来た。

——おまえの過去世は、充たされたものではなかった。おまえは心に不満を抱き、社会のすべてに、敵意を抱いていた。おまえは、属していた社会からおちこぼれた存在であり、ついに生き甲斐というものに無縁だった。

それは、おまえが若すぎたためもある。そして、自分を燃やす相手を探そうと焦り、そのあげく、一種の狂気におちいった。自分を、熱狂的な衝動に駆り立てることで、何かを証明しようとした。

そして、死んだ。

従って、おまえは、矢吹剣と名乗っていた若者の人生に対して、借りがある。おまえは、彼が果たそうとして果たせなかった夢を、実現させなければならぬ。彼は、自分が、取るに足らない若者であることに、

深い劣等感を抱いていた。何者か、になろうと願いながらも、その方策を見つけ出せずに、むなしく暴走して、死んだ。

わたしは、おまえを、これからある世界へ送り込む。

声は、しずかにいった。

——そこは、大いなるわざわいに充ちた世界だ。怒りと憎悪、悲しみと絶望とが交錯している世界だ。

おまえは、その世界に生きる者の一人に、転生する。おまえは、一つの宿命を負った身として、そこで生きる。その世界の、憂れうべき状態を変えるため、最善の努力を、果たすのだ。

それが、過去世である地球の青年——矢吹剣から、おまえが引き継いだ、任務だ。

——分かりました。

彼は、呟いた。その声に、逆らうことは不可能だ。それは全宇宙を掌握する大いなる意志であり、全能にして侵すべからざる存在であることを、知っていたからだ。

人間は、それを「神」という名で呼ぶ。しかし、どんな認識をも超越した、偉大な相手なのだった。

——あなたの仰せの通り、そこへ赴きます。でも、一つだけ教えて下さい。それは、地球から遠い世界なのですか？

——宇宙には、おびただしい知的文明が存在する。太陽とその惑星が属している銀河系だけをとっても、その数は百万の位に達する。

もちろん、「生命」にとつて、物理的距離は問題ではない。生命のよみがえり……輪廻転生は、全宇宙にひろくわたっておこなわれるものだ。生命や魂にとつて、宇宙はわが家も同様なのだ。

だが、答えよう。その世界は、たしかに遠い。地球の人類が持つ旅行手段では、とうてい行き着けぬ遠方にある。太陽系を、水たまりとすれば、そこに至るまでの宇宙は、海だ。そのように膨大な距離をわたる物理的手段を、人類は持たない。そこは、地球の属する銀河とは異なる銀河系の、世界なのだ。

だが、その住人は、地球の人類とおどろくほどよ